

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	田辺 理
論文題目	ガンダーラの仏教彫刻と生天思想
審査要旨	
<p>本論文は、現在のパキスタン北部とアフガニスタン東部を含む広義のガンダーラ地域で展開した仏教彫刻に、死後天界に転生することを希求するインド古来の来世観——田辺氏はそれを生天思想と称する——が強く反映していることを、明らかにしたものである。本論文が序論において提示しているように、ガンダーラの彫刻には、仏陀・菩薩などの尊像や仏伝・ジャータカなどの仏教説話図とともに、一見仏教とは無関係なディオニューロス神らの飲酒饗宴図や、ケートス、トリートーンといったギリシア神話に登場する海獣の図像などが見出せる。グレコ・ローマ美術の影響を如実に示すそうした異教的図像は、A.フーシェ以来、仏教的な意味を欠いた単なる建築の装飾モチーフであるとして等閑視されてきた。本論文の最も大きな特色は、それら「非仏教的外観の彫刻」こそ、善行を積んだ仏教徒が死後に赴く三十三天などの天界において享受できる快樂の表現であり、生天の象徴表現であることを解き明かした点にある。</p> <p>全体の章立ては、ガンダーラ美術の研究史を回顧しつつ「非仏教的外観の彫刻」をめぐる従来の見方を整理し、上記の仮説と論証の手順を述べた序論に続いて、第一部から第四部まで計十一の章で順次議論を進め、結論を付す構成である。まず第一部「生天思想について」では、『長阿含経』『世記経』、『正法念処経』など七種の経典を詳細に検討して天界の構造と快樂に満ちた天上界の様相を確認し、在家信者が死後に赴く先として最も好まれたのが三十三天であったこと、また、そうした天界に転生するには善行の功德を要するが、なかでも教団への布施や舍利供養、仏塔建立などが最上の果報を得る行為とされたことを論じている。その上で、舍利容器のカローシュティー文字銘などに見られる「Brahmapuñño (梵福)」「hitasukha (利益安楽)」という語句の分析等を通して、三十三天に代表される六欲天への転生願望すなわち生天思想が、ガンダーラの在家信者らに存在したことを明らかにした。これは本論文の大前提となるものであり、ガンダーラ美術の読解に新たな視点を導入する重要な提言である。</p> <p>続く第二部「仏教的な外観の彫刻と生天思想」では、二種の仏伝浮彫——高級娼婦アームラパーリーによるマンゴー園布施図と、ナーガ王の舍利供養図——を取り上げている。本論文の主眼である非仏教的外観の図像の検討に先立ってこれらの仏伝図について論ずるのは、第一部で確認した生天思想の存在を実作品において検証するためであるが、なかでもアームラパーリーが所有の園林を僧団に布施する物語をあらわした浮彫作品を論じた第一章では、本図像が法蔵部の経典に依拠することを特定し、生天思想を背景に成立したものであると結論する。アームラパーリーの釈尊供応の場面と考えられるローリヤーン・タンガイ仏寺出土作例など四点について精査した田辺氏は、手にした水瓶に着目し、葉缶形のそれが譲渡契約の保証の儀礼に象徴的に用いられるものであり、ここではマンゴー園の寄進を象徴する持物と解釈できることを明らかにした。さらに、当説話を説く諸経典のうち、水瓶(金澡瓶)の存在は法蔵部の経典である『長阿含経』と『四分律』にしか見られないことを指摘する。そして、この説話図の背景には、僧団への土地の布施を可能とした富裕な在家の存在と、伽藍や精舎を建立する土地を必要とした僧団側の事情、そして高額な布施の果報による生天を望んだ在家仏教徒の思惑があったことを論じ、ガンダーラにおける部派仏教内部の勢力拡張をめぐる抗争のなかで、優勢な説一切有部に対抗するために法蔵部が園林の布施という内容を経典に盛り込んだものと推論している。もっとも、経典と図像は相互に影響し合って生成したであろうから、必ずしも特定の経典が一方的に典拠とされたとは限らず、また土地寄進をめぐる両部派の相違についても更なる文献の精査が必要との審査意見が出されたものの、漢訳経典のみならずサンスクリット本、パーリ本や近年発見のガンダーラ写経も俎上に載せた論述には、一定の説得力がある。</p>	

氏名 田辺 理

こうして経典と実際の仏伝美術に生天への希求が確かに認められることを論証した上で、第三部、第四部では「非仏教的な外観の彫刻」に生天思想が関わっていることを論じている。第三部ではおもにディオニューソス神と眷属に関連する図像を扱い、実例として平山郁夫シルクロード美術館所蔵の「男性の顎に手を触れる女性」「鏡を持つ女性」浮彫、ザール・デリー仏寺址出土の従三十三天降下図を取り上げ、これらに見られる性愛表現や飲酒饗宴の図様が、六欲天とりわけ三十三天に転生した来世での悦楽を表現したものであることを論証した。たとえば異性の顎に手を触れる仕草の意味を探る考証などは、執拗なほど詳細を極めて他の解釈の余地を残さない。

ガンダーラ彫刻に見られる男女の交歓や饗宴の図像については、近年、田辺勝美氏が仏教徒が死後に極楽などの彼岸に到って享受できる快樂の造形表現であるとの説を提唱している。それは一見、三十三天などの天界への転生とする本論文の主張と近似しているようにみえるが、田辺勝美説と根本的に異なるのは、天界への生天はいまだ輪廻転生の中にあるという点で、それだけに、より現実的で享樂的な境涯である。在家信者や一部の出家者らにとって、観念的で達成困難な解脱涅槃よりも魅力的な所説であったはずで、古代インドのミトゥナ像やグレコ・ローマ美術からの影響を濃厚に受けながらガンダーラ地域でこうした図像が盛行した事情が理解できる。ガンダーラ美術研究に新生面を開く学説と評価できよう。

第四部は三つの章にわたって、ガンダーラの仏塔の階段の蹴込部や側桁に嵌め込まれたトリートーン、ケートス、イクテオケンタウロスなどの海獣浮彫を取り上げ、仏塔階段が担った意味と生天思想の関係を考察、それらが仏教徒を死後に六欲天へ導く導師、ないしは天界で得ることができる至福を象徴するモチーフとして採用されたものであることを明らかにした。そうした図像を仏塔の階段にあしらうことで、観者に生天を想起、希求させ、生天の可能性を確信させる役割を果たしたとする。最後に結論を付し、従来仏教とは無関係として等閑視されてきた非仏教的な外観の彫刻も、ガンダーラの在家信者らの率直かつ根本的な願望が表現された、まことに仏教的な彫刻であったことを強調して、全体を総括している。

審査委員会では、ガンダーラ美術を「生天思想」の視点で考察している点で一貫性があり、論旨が明快であること、欧米の膨大な文献をはじめ、サンスクリット語、パーリ語、漢文の経典を読み込み、地中海世界からインドにわたる広範な地域の作例を博捜し検討しており、優れた語学力と資料収集力のうかがえることが評価された。一方で、生天思想という観点に捉われ過ぎて考察が単純化されてしまい、多義的、複合的な意味や構造を見失っている部分があるのではないか、との指摘もなされた。また、ローマ世界からガンダーラに図像の形式や意味が伝播したとするが、その時期ないし媒体は何か、という質問や、異宗教を取り込んで表現した仏教美術には複雑な様相があったはずで、仏教的な外観・非仏教的な外観という二元論的分類については、より慎重な吟味が必要との意見があった。これらの問題点や不足については、今後の研究を通して追究、解決していくことが期待される。

以上、本論文の達成について、審査委員会は一致して博士(文学)の学位を授与するに値するものであると判断した。

公開審査会開催日	2015年 2月 28日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	仏教美術史	肥田 路美
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	Ph.D(ギリシア国立テサロニキ大学)	ビザンティン美術、キリスト教図像学	益田 朋幸
審査委員	龍谷大学・特任教授 名古屋大学・名誉教授	文学博士(名古屋大学)	ガンダーラ美術、仏教美術史	宮治 昭
審査委員	東京農業大学・教授	Ph.D(イエール大学)	中央アジア仏教、仏教学	山部 能宜
審査委員				

